

ハンセン病療養所機関誌における文芸作品の数量的分析

—1950年代における『愛生』掲載作品の推移を通じて—

○ ノートルダム清心女子大学院 博士後期課程 羽田 真依子 (008849)

キーワード：ハンセン病問題 文芸活動 療養所機関誌

1. 研究目的

長い間、ハンセン病とは治療法のない感染率の高い遺伝性の病気と誤解され、ハンセン病患者やその家族は偏見や差別に晒されるという歴史があった。今日、ハンセン病療養所（以下、療養所）は入所者の減少に伴い、今後の将来構想や職員の不足といった問題に直面している。今後の入所者の生活を検討するためには、これまでの実状を再確認する必要がある。よって、ハンセン病対策の中心的施設であり、現在全国各療養所において入所者数が最大である国立療養所長島愛生園について見ていく。また、療養所内では入所者が長期に亘って文芸活動を展開してきた。この点は、療養所内での生活に関して再確認する上で重要であると考えられる。したがって、ハンセン病患者の文芸活動を取り上げ、療養所における生活を検討している。

従来の研究では、療養所機関誌と文芸活動は療養所側のプロパガンダの側面がある指摘されているが、入所者の主体的側面はなかったのだろうか。本研究では入所者の自主性に焦点を置いて、入所者の視点から機関誌と文芸活動が果たした役割を分析している。

2. 研究の視点および方法

本研究では国立療養所長島愛生園機関誌『愛生』に掲載されたハンセン病患者の作品の収集および情報の整理を基とし、ハンセン病患者の文芸活動の検討を行う。収拾する作品は文芸作品である詩・短歌・俳句・川柳・創作小説を基本とし、掲載作品数の推移を数量的に分析している。対象期間は1950年代に設定した。

入所者は、療養所という社会資源が限られた環境で文芸活動を積極的に展開し『愛生』を今日まで発行してきた。すなわち、文芸活動とは療養所内での生活に根ざした行為の一つであったと仮定することができる。従って、趣味や娯楽に留まらない行為であった文芸活動の本質を検討することを本研究の目的としている。

3. 倫理的配慮

本研究で取り扱うハンセン病問題にはハンセン病患者と関係者への差別の歴史があった。現在においても解消されたい状況が続いている。そのため、「日本社会福祉学会の研究倫理指針」を厳守すると共に、ハンセン病患者と関係者各位への倫理的配慮を払っ

ている。また、数量的に扱うため個人名は一切扱わない。なお、歴史を対象とした研究であるため、歴史的記述に基づくことで、当時のハンセン病者が置かれていた厳しい立場を再確認することも、本研究において重要な意味を持つと考え、当時の歴史的表現をそのまま用いる場合もある。

4. 研究結果

10年間で掲載作品数の大きな変化は見られなかった。1955年頃から川柳が台頭し、掲載数が増加している。また、複数の同一人物が10年間にわたって掲載され続けていた。

機関誌の内容が時間を経るにつれて変化した。序盤は療養所側の色が濃い内容が多く、病態や政策に関する内容である。終盤は入所者側の色が濃い内容であり、療養所内生活に関する内容、慰安・娯楽等が目立っていた。さらに、掲載内容には検閲があったが、療養所に反発的な内容の作品も掲載されている。

そして、機関誌を通じて様々な交流の痕跡が確認された。プロの作家による批評や、入所者同士での作品の批評行為や、他園入所者の文芸作品の掲載、入所者や療養所職員の追悼記事関係である。したがって、以下の交流が成り立っていたと言える。1. 入所者⇄入所者(同園) 2. 入所者⇄入所者(他園) 3. 入所者⇄外部の人間 4. 入所者⇄療養所職員。なお、詳細については当日配布する資料に記載している。

5. 考察

以上のことから本研究では下記を明らかにすることができた。入所者は文芸活動を通じて心の思いを吐露することで、己の生きる証しを見つけようとした。作品には自身の置かれた立場を反映させていた側面もあり、作品を通じて他者へ訴えかけることを行っていた。

また、文芸活動や機関誌は入所者同士の共同体構築のツールとしても成立していた。同園内や他園同士での情報の共有や交流のやりとりの場として『愛生』や他療養所機関誌が役割を果たしていた。こうした場は感情と現実の表現先となっていた。その中で、入所者は感情表出として望郷や悲哀を訴えかけ、療養所内生活で感じたことを文章に起こして、作品を『愛生』に公開することで、入所者同士が共有する術を得ていた。さらに、文芸活動を通じて様々な訴えかけを行っていた。たとえば、生活環境、人間性、感情面、直面している現実等である。

文芸作品は入所者の想いや意識が反映されたものであり、掲載媒体となる機関誌『愛生』には療養所内で生活をしてきた人々の実情が集められているともいえる。今回は対象としなかった評論や随筆等でも入所者の生活に直接的な内容が多々含まれていることが確認できている。以上のことから、入所者は文芸活動を用いて、感情の表出や情報の共有、交流を行うと同時に、機関誌と通じて療養所内での生活に関する問題提起も行っていた。